
羅刹鳥

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羅刹鳥

【Nコード】

N5398N

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中国清代。何故か新婦が一人増えた。しかしもう一人の新婦は。中国の古典から題材を取ったお話です。

第一章

羅刹鳥

中国清代の話である。

康熙帝の時代から雍正帝の時代になっていた。国は安定し繁栄を極めていた。確かに満州民族による異民族統治であるがその統治は素晴らしいものであり国は落ち着き富んでいた。そんな時代の北京の話である。

ある金持ちの息子、名前を袁昇叙という。彼が妻を貰った。

花嫁の行列はそのまま彼に家に向かう。その中に婚禮の儀式を司る道士もいた。彼は道服を着て厳かにその行列の先頭にいた。そして前を見ていぶかしむ顔で言うのであった。

「いかなな」

「いかなとは」

「何かあるのですか？」

「前に墓場がある」

道士は前に見える墓場を指差して後ろの一行に話した。

「あれはよくない」

「しかしです、あれはです」

「いつも通る道ですし」

「それ程不吉に思われることもないのでは？」

「そうです」

これが周りの意見であった。

「それは別に」

「そう思いますが」

「そう、普段なら問題はない」

道士はいぶかしむ顔のままであった。

「普段ならな。しかしだ」

「しかしですか」

「そうだ。墓場に陰の気が満ちている」
陰陽五行のそれであつた。それが墓場に満ちているといふのである。

「それがだ」

「では道を変えられるのですか？」

「今から」

「そうした方がよい」

これが道士の主張であつた。

「さもないければよからぬことになる」

「そうですか。それでは」

「今から別の道を」

話はこれで決まりかけた。しかしここで花嫁の父がその白いものが半分以上になつてゐる辮髪を揺らしながら来てだ。大きな声で言うのだつた。

「いやいや、それは待つてくれ」

「道を変えるなと仰るのか」

「そうです。婚礼の行列が道を変えるなぞないことです」

彼の言つことも一理あつた。

「ですからそれはです」

「駄目だと言われるのですな」

「墓場なぞ何処にでもあります」

父はここでも一理ある話をした。

「ですから」

「ふむ。それではですか」

「このまま行きましょう。いいですな」

花嫁の父の言葉は絶対である。それでは誰も逆らうことはできなかった。そうしてであつた。彼等はこのまま先に進んだ。そして墓場の横に来るとだつた。

「！？風が」

「出て来た！？」

何の前触れもなく風が出て来た。そのうえで一行を包み込む。それはとりわけ花嫁の乗っている籠の周りを数回回った。そのうえで突如として消えたのだった。

誰もがその風にいぶかしんだ。何しろいきなり出て来て突如消えたのだ。皆風のことをいぶかしみながら話した。

「何なのだ、今の風は」

「一体」

「何だ？」

「危うい」

ここでまた言う道士だった。

「あれが出て来るか。ならばだ」

「どうされたのですか？今度は」

「一体」

「まさかと思いますが。とにかくです」

ここで彼は札を出してきたのだ。白い数枚の札をだ。

「いざとなればこれを使いますので」

「左様ですか、その札は」

「何ですか？」

「その時にお話します」

今はこう言うだけの彼だった。

第二章

「ですから」

「何かあるようですが」

「それでも一体何が」

「何かあるのですか？」

「私が思っている通りならおわかりになられます」

道士の言葉はさらに深刻で険しいものになっていった。

「できればそうしたことにはなつて欲しくはないですが」

「左様ですか。それでは」

「とにかく袁さんの家に参りましょう」

「今から」

こうして一行は新郎である袁昇叙の屋敷に向かった。門も壁も屋敷も素晴らしいもので袁家が栄えているのがわかる。出迎えてきたその袁昇叙も顔立ちは若々しく立派で身なりもよい。長身に黒々とした辮髪が映えている。その彼が笑顔で待っていたのだ。

「よく来られました」

袁昇叙は後ろに自分の家の使用人達を控えさせてそのうえで一行を迎えた。

「どうもです」

「はい、お待たせしました」

花嫁の父が笑顔で彼に応える。

「それでは今から」

「はい、士気を挙げましょう」

「これ」

父はすぐに周りの者に顔を向けて声をかけた。

「すぐに娘を」

「はい、それでは」

「ではお嬢様、籠を開けますので」

「おいで下さい」

こうして簾が開けられ花嫁が出て来た。しかしであった。

花嫁がまず出て来た。しかしである。一人出て来たところでもう一人出て来たのである。それに最初に驚いたのは花嫁自身であった。

「えっ、私がもう一人」

「私のもう一人」

二人で言うのだった。何とそこには二人の花嫁が出て来たのだ。

顔も髪型も服も飾りもだ。何もかもが同じである。見分けることなぞ不可能であった。

「これは一体」

「どういうこと!？」

二人で顔を見合わせて驚き合う。道士はそれを見て益々その顔を剣呑なものにさせてだ。そのうえで言うのであった。

「まずい、このままでは」

「このままでは」

「どうなるというのですか？」

「恐ろしいことになります」

こう言うのである。

「ですからです。花婿殿はです」

「はい？」

袁昇叙は道士の言葉に応えた。そのうえで彼の傍に来た。

「私が何か」

「これを」

こう言つて先程の札をそつと手渡してきたのだ。

「今日一日お持ち下さい」

「今日ですか」

「そしてです」

今度は赤い札を出してきた。そちらは二枚あった。

「奥方様達それぞれの背中に気付かれない様に貼っておいて下さい」
「この赤い札を」

「そうです、御願います」

「また何故ですか？」

袁は怪訝な顔で彼に問うた。

「この様な札なぞ」

「今は言えません」

秘密だというのである。

「それでもです。それで御願います」

「わかりました」

話はわからないが道士のその言葉に頷く袁だった。そうして自身はその白い札を懷の中に忍ばせそのうえで妻の背中にそれぞれその赤い札を貼っておいた。そのうえで式に入った。

第三章

式は袁を中央に置きその左右に花嫁をそれぞれ配した。やはり二人同じに見える。

人々はだ。その二人を見て首を傾げながら話をするのだった。

「これはまた一体」

「どうということだ？」

「花嫁が二人になるとは」

「妖術だろうか」

「わしにもわからん」

花嫁の父も首を傾げるばかりであった。

「何故だ。何故二人になった」

「お父上にもわかりませんか」

「今の事態は」

「全くわからん」

また首を傾げさせての言葉だった。

「これはどうということだ」

「左様ですか」

「それではこれは怪異でしょうか」

「何かしらの」

「だとすればどうした怪異だ？」

それは誰もどうしてもわからなかった。だが道士だけはかなり警戒する顔で式を取り仕切っていた。そうして式はつつがなく終わった。袁も内心いぶかしむばかりだった。

「妻が二人になるのはいい」

それ自体はいいとした。側室なぞ普通にあつた時代だからだ。

「だが」

しかしであつた。道士の言葉が気になっていた。それで胸に忍ばせているその札の上に己の手を置いてみる。すると何故か不安が消

える様に感じた。

そうしてそのうえで花嫁達と共に床に入った。所謂初夜であった。そこに入る時にだ。道士はまた彼に言ってきた。

「宜しいですね」

「わかっています」

彼のその言葉に頷く袁だった。

「札をですね」

「何があっても御身体から離すことのないよう」

「わかっています。それでは」

「はい、何があるうとも」

このことを念押ししたのであった。そのうえで袁は花嫁達と床の間に入った。人々はそれを見届けて後は彼等だけで無礼講であった。道士も生臭もの以外を勧められ楽しく過ごした。

そして誰もが酔い潰れた時だった。不意に床の間から恐ろしい鳴き声があがった。それを聞いて誰もが酔いから醒めた。

「何だあの声は!？」

「床の間からだぞ」

「まさか」

「すぐに行きましょう」

一人酒を飲まずまんじりともせずその場にいた道士が一同に告げた。

「部屋に」

「は、はい」

「それでは」

「一体何が」

皆彼の言葉に従いすぐにそこに向かった。するとそこにあつたのは。

何と部屋の中に一羽の灰色の鶴に似た大きな鳥が燃え盛っていた。鉤の様な嘴に雪の様に白い大きな爪を持っている。その目が赤く爛々と輝いている。

第四章

その鳥が燃え盛り床の間で暴れているのだ。袁は婚礼の時の服のままであり同じ様にその時の服のままである花嫁の一人を己の後ろに庇って部屋の端にいた。その手には剣がある。

「若旦那様！」

「御無事ですか！？」

「この鳥は」

「わからん」

袁は部屋に入って来た自分の家の使用人達にこう告げた。

「しかしだ」

「しかし？」

「何かあったのですか？」

「左側にいた花嫁が急に動くのだ」

彼は話すのだった。

「不意にあの鳥になり私に向かって来た。しかし私に目に嘴をやる寸前で何かに弾かれそしてだ」

「そして」

「どうなったと」

「不意に炎に包まれた。あの有様だ」

「そうだったのですか」

「それで」

「あれは何だ？」

袁は今度は鳥を指差して問うた。鳥は恐ろしい声をあげ続け部屋の中でもがき苦しみ続けている。

「見たこともない禍々しい鳥だが」

「羅刹鳥です」

ここで道士が話した。

「あれは羅刹鳥といえます」

「羅刹鳥！？」

「それは一体」

「詳しい話は後です。それよりです」

道士は懷からまたあるものを出して来た。それは木剣だった。

それでその羅刹鳥を打つとだった。鳥はこれまで以上に恐ろしい鳴き声をあげて床に落ちた。そうして事切れ最後には灰になって消えた。火は何処にも燃え移らなかった。

鳥が死んでからだ。道士は袁や花嫁にその父、それと屋敷の者達や花嫁の連れ一同といった全ての者に対して話すのであった。屋敷の中は一転して深刻な場になった。先程まで宴が行われていた場所であつてもだ。

「羅刹鳥というのは墓地の死体の気から生ずるものなのです」

「墓地の気からといいますと」

「ではあれは」

「そうです。普通の鳥ではありません」

まさにそうだというのだ。

「妖の類です」

「そうだったのですか」

「ですからあの時墓地の前を通るのを避けようとされたのですね」

「そうです」

こう花嫁の父の問いに答えた。

「だからだったのです」

「それでなのですか」

「そのせいで」

「はい。あの鳥は姿を変えることができ」

花嫁の姿になったそれだった。今では羅刹鳥が花嫁に化けていたのは言うまでもないことだった。何故ならその二人のうち一人がいないからだ。

「そして」

「そしてなのです」

「そうです。そしてです」

こう話していく。

「人に崇りとりわけ人の目を好んで喰らいます」
「だからあの時」

袁は自分の目にその右手を当てて述べた。

「私の目をですか」

「その通りです。そしてあの札は」

「護りの札でしたか」

「そうです。魔物を防ぐ札でした」

白い札についての話である。

「それを使ったのです」

「そうだったのですか」

「それが役に立ってくれました」

彼はそれを心から有り難く思っていた。

第五章

「本当によかったです」

「全くです。そして」

「そしてですか」

「あの赤い札ですが」

次に話すのはそれだった。赤い札のことだった。

「あれは魔を滅ぼす札でした」

「魔を滅ぼす」

「その札だと」

「人に化けている魔物が正体を現した時に焼き滅ぼす札だったので
す」

そうであつたというのである。あの赤い札はである。

「その魔物の身に着けていなければならぬですがその通りです」

「それによつてですか」

「あの札は」

「赤い札まで役に立って何よりです」

くれぐれもという思いがその言葉の中にはつきりと存在していた。

「本当に」

「その通りですね。ただ」

「ただ？」

「あの魔物はまた現われます」

道士はこう言うのであつた。暗い顔で。

「墓場の人の陰の気が尽きない限りはです」

「それがあの魔物を生み出すからです」

「それによつて」

「その通りです。現れます」

道士は話す。

「ですから婚礼の時なぞに墓場の前を通るのはです」

「避けるべきなのですね」

「それで」

「そういうことです。くれぐれもです」

そしてだ。それを聞いていた花嫁の父はまずは瞑目した。そうしてそのうえでその口を静かに開くのであった。

「いや、今回は私が迂闊だった」

彼は己の過ちを認めていた。

「あの時墓場の前を避けていればこうしたことにはならなかった」

「いえ、ですが」

「それは」

「いや、そうだ。危うく婿殿も娘も害を受けるところだった」

「目をですからね」

袁もここで言った。

「目を喰らわれるところでした」

「そうですね」

そして花嫁も言うのだった。

「危ういところで」

「ですが難は逃れました」

道士がここでまた言ってきた。

「それをよしとしましょう。それでは」

「それでは？」

「魔物は出ましたが御二人はめでたく結ばれました」

彼が今言うのはこのことだった。

「ですからそれを祝福しましょう」

「それをですか」

「今は」

「はい、祝いましょう」

また言う彼であった。

「難を逃れたこともまた」

「そうですね。それでは」

彼の今の言葉に最初に応えたのは花婿である袁であった。

「今から再び」

「はい、それでは」

「また」

「宴を開きましょう」

夜も更けようとしていたがそれでも再び宴をはじめる彼等だった。難を逃れた後の宴はまた楽しいものであった。これは北京で実際にあった話である。北京では今も婚礼の行列が墓場の側を通らないのはこの話に由来する。また墓場にいる鳥がこの街で事の他忌み嫌われるのもこれが始まりである。

羅刹鳥

完

2010・3・8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5398n/>

羅刹鳥

2010年10月8日14時14分発行